

大学院授業内における アクティブ・リスニングの体験報告と考察

Report and the consideration of Active Listening in Graduate School Class

菅 佳菜美

跡見学園女子大学大学院

人文科学研究科臨床心理学専攻

Kanami Suga

Division of Clinical Psychology,

Graduate School of Humanities, Atomi University

要約

まず大学院の授業内で行われたアクティブ・リスニングの学習の進め方について述べた。次にアクティブ・リスニングの5つの技法〈①簡単な受容、②くり返し、③明確化、④支持（サポート）、⑤質問（リード）〉に着目しながら、担当教員によるデモンストレーションの観察学習について述べた。さらにアクティブ・リスニングの体験学習について、カウンセラー体験とクライアント体験に分けて報告と考察を行った。総合考察しては、①デモンストレーションの観察学習では5つの技法をカウンセラー側からとクライアント側の両方の視点からの学びを得たこと、②カウンセリング練習を重ねることで課題の内容にも深みが増し、自己の成長を感じたこと、③クライアント役を実際に体験してみると、一生懸命聞いてくれること自体が受容的な態度だと実感できたことが示された。

【Key Words】アクティブ・リスニング、デモンストレーション、カウンセラー体験、クライアント体験

I はじめに

本論文では、2020年4月から7月にかけて、修士1年の院生を対象とした大学院授業内で行われたアクティブ・リスニングの体験を報告し、体験や毎週課題として提出していたレポートをもとに考察を行う。また、COVID-19の影響により、大学が立ち入り禁止になったことを受け、授業はZoom Cloud Meetingsを利用して遠隔で講義を行った。後半2回は立ち入りが緩和したため、大学内で行った。なお、〈課題〉に関

しては、感染防止の観点から全てオンラインで行った。

大学院生によるアクティブ・リスニングの体験報告と考察としては、斉藤・多和ほか（2014）、鹿子田・新ほか（2014）、西野（2017）、大谷（2018）の論文がある。また、加藤・相馬ほか（2013）の論文においてはアクティブ・リスニングの実習体験による意識変容過程の仮説モデルの検討を行っている。

Ⅱ アクティブリスニングの学習の進め方

第1回目の授業では、「カウンセリングとは」、「カウンセリングの基本原則」、「カウンセラーの基本的態度」、「カウンセリングの3つのコミュニケーション・チャンネル」、「カウンセリングの基本技能」に関しての講義が行われた。

第2回は、①デモンストレーションとして、担当教員がカウンセラー役、受講学生がクライアント役になり、「今ここで話したいこと・話せること」について50分間の面接（個人）を行った。②その後、デモンストレーションに対しての感想や質問を学生が述べた。

授業後の〈課題〉として、学生同士でペアとなって、カウンセラーとクライアントの体験をそれぞれ50分ずつ、授業後から一週間以内に行い、体験に関してレポートをワードで作成しメール添付で提出した。

第3回からの授業の主な流れは、①学生から提出されたレポートについての教員のコメント・フィードバック、質疑応答、②デモンストレーション、③デモンストレーションに関しての感想・質問、教員からのコメントである。

〈課題〉の実際としては、学生同士ペアとなってカウンセラー役とクライアント役の体験を行った。自分がカウンセラー役になった際、後から見返すことができるようにZoomの機能である録音録画を行った。また、50分間の面接終了後、クライアント役であった学生に面接内で気になった点や改善点といった感想・意見を求めた。

Ⅲ 担当教員によるデモンストレーションの観察学習

各講義において担当教員によるデモンストレーションが行われた。アクティブ・リスニングの5技法について、それぞれ簡単な説明を述べた後に、観察学習を通して得た学びについて報告、考察を述べる。

① 簡単な受容

簡単な受容とは、「うんうん」、「なるほど」、「そうですか」などのうなずき、あるいは声に出さずに軽くうなずきながら聴くことである（野島，2020）。そうすることでクライアントは話しやすくなることが考えられる。

担当教員のうなずきのタイミングとしては、話の区切りが良いところでうなずくことで、クライアント役の話途中で邪魔をしていないように思えた。

同じ「はい」でも、相手が悲観的に語っている場合と、楽しい話をしている場合では声のトーンや表情が異なり、クライアント役の話をしっかり聴いていることが観察している側にも伝わってきた。筆者がクライアント役になった際は、困っていることについて話したが、それに対するうなずきは、優しさや温かさを含んでいるように感じられ、このカウンセラーは自分に寄り添ってくれているのだ、自分の気持を理解してくれているのだという感覚になった。そう感じたことによって話しやすくなり、同期の見ている中であっても、自分の悩んでいることを話すことができた。「はい」や「うん」という短い返し一つであっても、クライアントに与える印象は大きく、カウンセリング全体に影響を与えるということが体験的に理解できた。

② くり返し

くり返しとは相手がある程度話したとこ

ろで、「～というわけですね」、「～ということですね」などをくり返すことである（野島，2020）。くり返すポイントを捉えて行うことが重要である。くり返しを行うことで、相手は聴き手に聴いてもらっていると実感することができる。

筆者がくり返しをする際には無意識的にも意識的にも言い換えをしてしまうことが多かったが、担当教員はくり返しの際には同じ言葉を用いており、言い換えをする際には意識的に、言い換えをしたほうがクライアント役にとって自己理解が促進されると確信を持って行っていた。この意識が筆者と異なっていた。また、ネガティブな発言に対しても、誤魔化したり、ポジティブな言葉に言い換えをしたりせず同じ言葉である、ネガティブな言葉で返していた。ネガティブな発言を受けると、筆者はそのままクライアント役へ返すことに抵抗を感じていたが、それは相手の言葉を否定することに繋がる。相手の言葉を受容し、ネガティブな言葉をそのまま返し、クライアント役はそれを受け取ることで、自分はネガティブな感情を持っていると気づくという自己理解につながる事が考えられる。

筆者がクライアント役になった際、担当教員は筆者の言葉をそのまま返した。

③ 明確化

相手がまだはっきりと言語化していないことを、聴き手が先取りして述べることを明確化と呼ぶ（野島，2020）。明確化することで話し手の自己理解がより進みやすくなる。

クライアント役が長く話をした後に「○なんですね」と状況をまとめて話しており、状況の整理を行っていた。観察してい

る側にも話の流れがクリアになったため、クライアント役も同じように感じていたのではないかと考えられる。「なんですね」という語尾を用いることによってカウンセラー側の決めつけではなく、「こういうことでしょうか」という確認の意味を込めた明確化になっており、クライアント役にそれを否定する自由も与えられているのではないと感じた。

④ 支持（サポート）

支持（サポート）とは、相手の発言に対して、聴き手が励ましやいたわりを述べることであり、それを行うことによって相手は気が楽になり、自信をつけることができる（野島，2020）。

健康度が高い院生相手であったため、明確な支持の発言はあまり見られなかった。しかし、カウンセラー側のうなずきや視線、声のトーン、表情からは話を聴いているということが伝わり、それらがサポートとなってカウンセリングが進んでいったように感じられる。カウンセラーのノンバーバルなメッセージも受容のメッセージを伝えるのだと知ることができた。

⑤ 質問（リード）

質問リードとは、相手の話で分かりにくい箇所や、漠然としている部分、気になったところなどを問い返すことである（野島，2020）。野島（2020）によると、聴き手がわかりにくい、漠然としている、気になる感じを持つ部分というのは、相手自身にとってもあいまいな部分であることが多い。そのため、聴き手は問い直されることで自分の気持や考えを探索したり明確にしたりすることに繋がる。

デモンストレーションのカウンセリング

において、同じような話題が出てきて堂々巡りになる場面があり、その際に担当教員は質問を交えて応答していた。クライアント役は同じテーマしか話していないように感じられるが、その中に新たなキーワードや話のテーマが表れてくる。その様子を、講義中に担当教員は螺旋階段を使ってイメージしていた。同じところをぐるぐると回っているように見えて、上には進んでいるのが螺旋階段である。それと同じようにカウンセリングも進行していくのだと考える。実際にクライアント役になった際にも、同じようなテーマを話す中で、新たな発見やポジティブな反応が出てくるがあった。それは螺旋階段を上っているように話すたびに新たな変化が起こっているのだと思う。

IV アクティブ・リスニングの体験学習

Rogers (1966) は治療的人格変化のための必要で十分な条件として①二人の人が心理的接触を持っていること、②第1の人（これをクライアントと名づける）は不一致の状態であること、③第2の人（これをセラピストと呼ぶ）はこの関係の中で一致しており統合されていること、④セラピストは、クライアントに対して、無条件の肯定的配慮を経験していること、⑤セラピストは、クライアントの内部的照合枠について共感的な理解を経験しており、そしてこの経験をクライアントに伝達するように努めていること、⑥セラピストの共感的理解と無条件の肯定的配慮をクライアントに伝達するということが最低限に達成されること、以上の6つを、クライアントに伝達することとして挙げている。ロジャーズはそ

の中でも「受容（無条件の肯定的配慮）」、「共感（感情移入）的理解」、「真实性（純粹性・自己一致）」をセラピストの態度として必要な中核三条件として挙げている（1996）。面接練習場面では、授業資料内の簡単な受容、くり返し、明確化、支持（サポート）、質問（リード）の5つを中心に練習を行った。それら5技法を意識する上で、中核三条件を念頭に置きながら練習に臨んだ。以下に、5つの技法についてカウンセラー役とクライアント役でそれぞれ体験した内容を報告し、考察する。

1. カウンセラー体験について

① 簡単な受容

何度か練習していく中で、自分の返答が単調になっており、それについてクライアント役から練習後に指摘をいただいたため気づいた。その練習後、録画を見返してみると「そうなんですね」と毎回クライアント役が話し終わる度に返していたことがわかった。返事に変化が見られないことで、機械的な印象を受け、クライアント役からのフィードバックからも形式ばった感じがするという意見をいただいた。

② くり返し

くり返しの際はクライアントが使った言葉をそのままくり返すことが大切だと学び、自分の言葉で言い換えをしないことを心掛けた。しかし、くり返していくうちにクライアント役がどんな話をしていたかわからなくなり「こんなこと言っていたらう」と思いながら話すことや、くり返すつもりが自分の言葉に言い換えていた場面もあった。また、ネガティブな発言に対して、そのまま使われた言葉をくり返すこと

に抵抗を感じていたため、柔らかい言葉遣いに言い換えてしまう場面もあった。クライアント役が言っていた言葉と異なる言葉遣いを用いて返すのでは、相手を理解することはできないうえ、相手自身の自己理解が進まないと考えられる。全ての練習で、クライアント役が用いた言葉を使って繰り返しをできるように心がけた。

ノンバーバルな面に着目すると、繰り返す際に話の内容を思い出しているため、目線が斜め上を向いていることがあった。録画した動画を見ると、目をいきなりそらしたように感じられたため、相手が不快に感じる可能性もあるだろう。

くり返しを意識してみて、感じたことはコントロールできないような感覚である。頭の片隅には相手の言葉を使おうという意識があるのに、口から出た言葉は自分の言葉であり、言った瞬間に後悔した。頭の中に浮かんだ自分の言葉をそのまま口に出していることがあり、自分の口なのにコントロールができない感じがした。

③ 明確化

5つの技法の中ではあまり用いる回数は少なかった。しかし、クライアントが言い表せずにはいた気持ちがあり、その気持ちを明確化しようと試みた回があった。その面接が終わった後にクライアント役に、その言葉についてどう感じたか尋ねてみたところ、「強い感じがして、踏み込まれていると感じた」というフィードバックをいただいた。その時の言い方では、クライアント役の自己理解を深めることとは逆で、侵襲的な印象を与えていたのだと気がついた。こちらが無理に表現させようとすることは傷つけることになり、相手が自身の気持ち

を言い表せずにはいたとしても無理に行うべきものではないことを学んだ。クライアント役のためになると思って行ったことが、やり方や伝え方によってはマイナスの影響を及ぼしてしまうことがあるとわかった。このようなことを何度か経験し、カウンセリング練習を重ねるにつれて、自分の発言に臆病になっていることに気がついた。明確化が必要と思われる場面でも、くり返しをして言いたいことがクリアにならないことがあり、必要な時に恐れずに発言しなければならないと感じた。

⑥ 支持（サポート）

健康度が比較的高い院生が相手であったため、使う頻度は高くはなかったが、「○○なことがあっては、本当につらいですね」や、「そういった中でも、頑張っているのですね」などを、つらいことを話してもらった後に相手をいたわる声掛けを行った。それに対してクライアント役からはポジティブなフィードバックをいただけなので、練習の中では支持的な声掛けができていたと考えられる。

⑦ 質問（リード）

日常生活で用いられる質問とは異なり、カウンセラー役である自分の興味の範囲で質問をするのではなく、クライアント役の自己理解を深めるために行うものである。カウンセリング練習を行っている最中には、繰り返すことを意識していながらも、質問をしたほうが良いかもしれないと思う場面もあった。しかし、自分が誘導してしまうのではないかと恐れて、繰り返しの技法ばかり使っている回が多かった。また、沈黙する場面も多かった。沈黙には「待つ」沈黙と、「カウンセラーが口火を切る」沈黙

の2つがあると講義内に知った。練習内で沈黙が起こる度に、この沈黙は考えている時間なのか、何を言っているのかこんがらがっている沈黙なのか、待つべきか、こちらから口火を切るべきなのかというように迷う場面が多かった。練習の中で判断して行った対応として、待つことが最も多かった。自分から話をしていく勇気を持てなかったことが思い出される。沈黙は辛いと感じるのでそわそわしてしまい、クライアント役が話し始めると安心し、また沈黙になると焦り、話し始めてもらえると安心するということをカウンセリング練習の中で何度か経験した。それではカウンセラー役である自分自身が安定していなかったことが考えられる。

積極的傾聴の実習による意識変容過程の仮説モデルを検討した加藤ら（2013）の研究では、トレーニング過程を前・中・後期に分け、意識変容過程の分析から各段階の課題を明らかにしている。①前期はカウンセラーとしての自分自身の在り方や技法の扱い方に意識が向けられる段階であり、カウンセラーとしての在り方を模索しつつ、技法に対する理解と体験に基づく気づきを得て「技法になじむ」ことが課題だと加藤ら（2013）は述べている。②中期は寄り添うことに対する意識が高まり、課題としてはノンバーバルなコミュニケーションへの着目を視野に含めたクライアント理解と寄り添いであると加藤ら（2013）は述べている。③後期は、技法とカウンセラーとしての在り方に対する意識をより具体的に発展させ、迷いはありながらも、カウンセラーとしての自己効力感や気づきを得ていく段

階である。後期における課題としては、「気づきを伴う体験の包括と、Coとしての『課題具現化への取組』である」と加藤ら（2013）は推察した。筆者の体験においても、前期に行った練習のレポート内では、抵抗や不安、恐れといった自身の感情や、アクティブ・リスニングの技法への意識が述べられており、「技法になじむ」ことが課題であったことが推察される。中期に行った練習のレポート内においては、クライアント役に対する記述（沈黙や表情への言及や気持ちの推測）が増えたことがわかった。それらの記述からは、沈黙への対応の課題や相手への侵襲性といった、クライアント役への理解や対応の課題が述べられており、加藤ら（2013）が述べている中期の課題「CI理解と寄り添い」と一致するものであった。後期にあたる時期のレポートにおいては、これまでの自身の振る舞いやクライアント役への注目に細やかさが表れ、細部に注意が向くようになったことが推測される。そこで得られた気づきから今回の取組の課題を見出しており、加藤らが述べた「気づき」と「課題具現化への取組」が課題であることが考えられる。以上のことから今回のカウンセラー体験においても、加藤ら（2013）が述べた3期に分類されることが明らかになった。

2. クライアント体験について

① 簡単な受容

クライアント体験では、筆者の声のトーンに合わせて、カウンセラー役のうなずきのトーンが変わっていた。自身がカウンセラー役の際には、単調なうなずきとなって相手に冷淡な印象を与えてしまったが、ク

クライアント役の話の内容によってうなずきの内容にも変化があることで、自分の話を聴いてくれていることが伝わってきた。練習を始める際には毎回緊張しているが、話が進み、相手が聴いてくれているということが伝わると徐々に話に乗っていく感じがした。それは、カウンセラー役のうなずきによって、話しやすい雰囲気が作られていたように考えられる。

② くり返し

練習が進むにつれて徐々に話す悩みの深さが深まっていき、ひたすらに自分の話をした回があった。クライアント役である自分が話に夢中になったとしても、カウンセラー役が丁寧に自分の話をくり返してくれたため、話の中心を見失わずにいられた。カウンセラー役が落ち着いて受容してくれたことによって、話がぶれずに安心して話せたのではないかと、課題レポートの内容から推測される。また、クライアント役として臨んだ際に話がまとまらない場面があった。それに対してカウンセラー役は一つ一つ丁寧にくり返しをして、話が進んでいった。クライアントが混乱している時には丁寧な繰り返しを、クライアントが自己について理解を深めるという視点から重要になってくるのではないかと考えられる。

くり返しの際に自分の使っていない言葉が出てきたことあり、カウンセリング練習の中でその旨をやんわりと伝えたが、なかなか伝わらず、自分の言いたい気持ちや話が相手に伝わらないもどかしさを感じた。クライアントが言った言葉をそのまま返すことによって、話を聴いているというメッセージになるということがクライアント体験を通して理解できたと考えられる。

③ 明確化

自分が話した雑然とした内容に対して、カウンセラー役が一つ一つ整理して、「○○○について考えているのですね」、「○○と○○という方法を思いついたのですね」と明確化してくれた。自分の言ったことを聴いてくれているのだという安心感に繋がっただけでなく、自分が何で悩んでいるのかがはっきりし、今持っている解決策が整理された。悩みや持っている解決策が明確化したことで今ある問題に対してどうしたいのか、どうするとうまくいきそうかが見えてきて、解決に前向きな気持ちで臨もうという意識が出てきた。カウンセラー役から何か提案があったわけではないけれども、明確化してもらうことで自分の力で解決に向かおうという気持ちになれた。

明確化が必ずしも自分の言いたいことが表現されているとは限らなかった。しかし、的を射た言葉でなかった時には自分が感じていることはそうではないのだと自己の中で感じることができた。それをカウンセラー役に伝える際に「そうではなくて、こうだと思う」と言葉にすることで明確にできなかった気持ちを形にすることができた場面があった。それを体験する以前は、明確化においてクライアント役が言いたいことと異なることを伝えてしまったらという不安が大きく、明確化することに臆病になってしまっていた。しかし、言いたいことと外れていたとしても、クライアントの理解が進むことがあるのだと、クライアント役を体験したことで知ることができたと考えられる。

④ 支持（サポート）

カウンセラー役の際には、相手の健康度

が高いという考えからあまり用いていなかった技法であったが、実際にねぎらいの言葉をかけてもらえると励ましになるものとクライアント体験から学んだ。カウンセラー役が私の体験をねぎらってくれることで、自分を肯定的に捉えることができ、自分自身を受容する気持ちが出てきた。健康度が高いクライアントであったとしても、支持（サポート）は用いる必要がある技法だと考えられる。

⑧ 質問（リード）

自分が質問（リード）を用いる際には、「踏み荒らされていると感じた」という意見をいただいてから慎重になっており、用いる回数は少なくなった。クライアント体験では何度かこの技法を体験したが、相手が上手に用いてくれたためか、そこまで侵襲的に感じることは少なかったように感じる。むしろなぜ自分がそう考えたのか、そう思うのか、理由を考えるきっかけとなって、自己理解が深まっていった。それはカウンセラー役が自己の興味からではなく、クライアント役である私の不明瞭な部分にスポットライトを当てたような質問の仕方をしてくれたためであろうと考えられる。

齊藤ら（2014）は論文の中でクライアントを体験した期間を「困難期」と「体験的自己理解期」に分けて考察している。「困難期」は自身の自己開示の困難さが表現されていた時期を指し、「体験的自己理解期」自己開示の不慣れさが少し和らぎ、自己理解が実感を伴って進んだ時期を指している。今回のアクティブ・リスニングの体験においても、「困難期」において困難であった自己開示が、「体験的自己理解期」

に移行して自己開示が進んだことで、クライアント体験の際に、練習を重ねる度に話題にする悩みの深度が増していったのではないかと推察される。

V 総合考察

1. デモンストレーションでの観察学習

デモンストレーション体験では、5つの技法をカウンセラー側からとクライアント側の両方の視点から学びを得た。クライアントでもカウンセラーでもない立場だからこそ、うなずきのタイミングやくり返しの逐語の内容、視線などについて観察を通して学ぶことができた。

また、受容とは、言語的な要素からのみではなく、表情や声のトーン、しぐさといったノンバーバルの部分からも伝わるものであることが確認できた。デモンストレーション全体を通して、カウンセラーが醸し出す雰囲気から温かさや支持的な態度、寄り添おうとする姿勢が受け取れると感じた。筆者自身のカウンセリング練習では、雰囲気は固く、温かさは感じられないことが多かった。今後の課題として、技法を意識しながらも、クライアントに寄り添う気持ちを持ち続け、それがクライアントに伝わるような雰囲気、態度を表現できるようになることだと考えられる。

2. カウンセラー体験

前・中・後期の3期に時期が分類され、それぞれの時期における課題を意識して練習を行っていたことが推察された。それぞれの時期において意識した課題は異なり、練習を重ねることで課題の内容にも深みが増し、自己の成長を感じた。

カウンセリングは聴くと同時に頭で整理して、相手のノンバーバルな部分も観察するという同時進行で行うべきことが多い行為だということを実感した。くり返しにおいては言い換えを行ってしまいがちであるが、クライアントの自己理解促進のためには、相手の発言と同じ言葉を用いて、くり返しを行うべきだと学んだ。また、カウンセリングはクライアントとカウンセラーのやり取りで成り立っていて、カウンセラーの言動が大きく影響するとわかった。カウンセラーの一言一行はカウンセリングで重要になってくる。また、クライアントの一言一行は相手を理解するための手がかりになり得る。カウンセリング中の言動はすべて「こうするのだ」と意識をして取るべきだと感じたが、100%をコントロールすることは難しいので、少しでも理想に近づけるように努力し続けたいと体験を通して考えた。

質問リードについては、回数を重ねるにつれて臆病になっていったことが推測された。慎重になることは良い進歩だと思うが、ここでは質問リードをしたほうが螺旋階段を上ると考えた時には、怯えずに使っていくべきである。

カウンセリング練習が後半に近づくにつれて、自分の中に答えが見えない問いが増えてきた。何となくすっきりしないようなひっかかりや、クライアントによってやりづらさがあるモヤモヤすることが多かったが、担当教員からのフィードバックで、それらについてこだわって考え続けることが大切だと知ったのであきらめずに考えていきたい。

3. クライアント体験

人はわかってもらうことで、丁寧に自分自身の内側に触れ、自分の心の声に耳を傾け、自分らしい生き方を探し始めることができる」と諸富（2010）は述べている。今回のクライアント体験では、自分と同じく学び途中である院生が、受容的な態度を表現してくれたり明確化してくれたり、筆者の気持ちを共感しようとしてくれたので、筆者は自己に目を向け、自己理解が促進されていったのだと考えられる。

また、クライアント役を実際に体験してみることで、一生懸命聞いてくれること自体が受容的な態度だと実感することができた。これまでの学びにおいて、一生懸命に耳を傾けることがクライアントにとって大切だと知っていながらも、技法の方が重要だと考えていた。体験において、私と同じ学び途中の同期がカウンセラー役であり、まだ技法も完璧ではないが、それでも話をしてよかったと思えた。その経験から一生懸命さがいかに大切かを知ることができた。鹿子田ら（2014）は、問題で余裕のなくなったクライアントの心に、アクティブ・リスニングによってカタルシス効果をもたらされ、それにより余裕が作り出されたことや、明確化によって、クライアントの悩みについて自己理解が進んだことがうかがえることを考察している。受容的な態度が重要と知識で知っているだけよりも、自分でクライアントを体験して、実感することで知識が深まったように考えられる。さらにクライアントの立場を体験することでカウンセリング場面においてよりクライアントを大切にできるように感じた。

謝辞

本論文執筆にあたりまして、ご指導頂きました野島一彦先生に心から感謝申し上げます。

文献

鹿子田睦月・新彩子・寺澤麻衣・植竹奈美子・八木あずさ・野島一彦 (2014). 大学院授業における「積極的傾聴」の実習体験報告と考察. 跡見学園女子大学附属心理学教育相談所紀要. (11), 91-106.

加藤美佳・相馬理沙・高橋亜希・マーシャル理恵子 (2013). 「積極的傾聴」実習体験による意識変容過程の仮説モデルの検討. 跡見学園女子大学附属心理学教育相談所紀要. (10), 153-163.

諸富祥彦 (2010) はじめてのカウンセリング入門 (下巻) —ほんものの傾聴を学

ぶ. 誠信書房.

西野秀一郎 (2017). 大学院授業における「積極的傾聴」の実習体験報告と考察. 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要, 5, 77-83.

野島一彦 (2020). 令和2年度跡見学園女子大学大学院「臨床心理面接特論」講義資料.

大谷桃子 (2018). 大学院授業におけるアクティブ・リスニングの実習体験報告と考察. 跡見学園女子大学相談室紀要 (15), 71-78.

Rogers.C (1966), 伊東博訳. サイコセラピイの過程. 岩崎学術出版社.

斉藤暁子・多和千里・矢嶋文哉・野島一彦 (2014). 大学院授業における「積極的傾聴」の実習体験の報告と考察. 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要(2), 77-86.